

『第二言語習得・教育の研究最前線 2005 年版』発行にあたって

佐々木 嘉則

今年も『言語文化と日本語教育』の 2005 年増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線』シリーズの 4 冊目を発行することとなった。今回は『言語文化と日本語教育』の発行主体である日本言語文化学会の会員からの 5 本の投稿論文を 2 章に分けて収めたのに加え、記憶理論に関わる講演録を収録している。

巻頭の序章「認知心理学と第二言語習得研究」に収録した小柳かおる氏の講演録(「認知心理学と第二言語習得研究」)は、近年第二言語習得の研究の間で注目を浴びている認知心理学的アプローチの中でも特に中核的な役割を果たす記憶理論に焦点を当てて習得研究との関わりを論じたものである。この領域の膨大な研究を手際よく整理しているため初学者にとっては格好の入門書であり、また経験を積んだ研究者にとってもこの分野の全体像を新たな視点から見直すうえで貴重な文献といえる。

それに続く第 1 章「文法の習得」には菅谷奈津恵氏(「日本語のアスペクト習得に関する研究の動向」)・単娜氏(「日本語の指示詞に関する研究概観」)・遠山千佳氏(「助詞「は」に関する第二言語習得研究の流れと展望」)のレビューを収めた。このうち菅谷氏の学位取得(2005 年秋)後の最初の著作となる今回の展望論文は、本論文集シリーズ 2002 年版に同氏が寄せた動向報告(菅谷 2002)を大幅に拡張充実したものである¹。両者を対照してみることは、この 4 年間の菅谷氏の思索の深化と広がりを追う上でも興味深いことと思う。

単娜氏の論考は、本シリーズにおける指示詞研究のレビューとしては 2003 年版(森塚 2003)に続き 2 本目である。森塚氏の論考が第二言語習得研究のために最適な枠組みを探るという問題意識から主として日本語学あるいは国語学の知見を再整理したものであるのに対し、単娜氏は対照分析的手法により諸外国語と対比した日本語指示詞の特徴を論じてい

るのが特徴である。

一方、遠山氏の論考は日本語学習の難所の一つとして知られ習得研究者からも注目を浴びながらこれまでまとまったレビューのなかった助詞「は」の習得をとりあげたものである。その中で「は」と「が」の使い分けに関するこれまでの習得研究も総整理されているので、教育実践への示唆を求める読者にとっても貴重な情報源となることと思う。

第 2 章「言語技能の習得」は石井怜子氏(「結束性構築の視点から見た第二言語読解研究概観」)と楊虹氏(「話題転換研究の概観」)のレビューを収録している。このうち石井氏の論考はスキーマ理論にもとづく読解研究の限界を指摘しそれに替わる枠組みを広範な心理学文献から探ったものである。一方、楊氏の論考は会話分析の中でも話題転換研究に的を絞って多数の原典にあたり、精緻な整理と再構成を試みている。

以上の 5 本の掲載論文はいずれも 20 ページあるいは 30 ページ台に及ぶ長編揃いとなっている。もちろん学術論文は長さを競うべきものではないが、膨大な先行研究の知見や意義を存分に論じ切るためにそれなりの紙幅を要したとしても不思議ではない。ことばを削りに削り論点を絞った短編の佳作論文と存分に論を尽くした長編の大作は、それぞれ違った形で学問の発展のために寄与しうるものである。

しかし実際には、既存の国内誌の多くには厳しい字数制限があるため、長編の投稿論文は門前払いされてしまいがちである。存分に筆を振るえるだけの紙幅を確保しようと思えば自著を刊行するほかに、費用負担を含めて特に若手研究者には容易に手が出せない贅沢であった。

そういった長編論文を発表する場を提供できるとすれば、本シリーズのような一風かわった編集スタイルの論文集にもそれなりの存在意義があるだろう。一般雑誌(magazine)のスピードと書籍(book)の

密度を併せ持った融合形として出版界で脚光を浴びているのが「ムック(mook)」という新しい出版形式であるとすれば、学術雑誌(journal)と書籍(book)の特徴を兼ね備えた「ジュック(jook)」の可能性を探るのも、学術出版における一つの実証実験といえるだろう。本シリーズの各号に対してそれぞれ ISBN を取得し「本」としても一冊単位で図書館等に収納することを可能にしているのは、そのような意図にもとづく。

とはいえ、紙幅の制限がないのをよいことに執筆者が無駄にことばを重ねて冗長な文章を綴るのは読者にとって迷惑このうえない。その気配が見えたら厳しくご指摘くださるよう査読者諸氏にあらかじめお願いし、その審査を通過したのが本号に収録した5本の論文である。その本来の趣旨が十分に活かされているかを読み手の立場から判定することにより、読者諸賢もこの実証実験に御参加いただければ幸いである。

追記

前号(2004 年版)発行以降、大関浩美・菅谷奈津恵の両氏がめでたく博士号を取得した。この2名(大関氏は2002 年版と2003 年版、菅谷氏は2002 年版と2004 年版に論文を掲載)を含め、これまでに本シリーズにレビュー論文を寄せた三十余名の博士後期課程所属の大学院生のうち計10名がその後、最高学位にまでたどりついたことになる。2002 年版に「解説」を寄せた清田淳子氏もその後、学位を取得している(因みに、2002 年版に掲載の池田玲子氏と2004 年号掲載の近藤彩氏は、それぞれ投稿時に既に学位取得済み)。

これら各氏の論考を含む本論文集シリーズ2002 年版は、ながらく版元品切れとなっていて諸方にご迷惑をおかけしていたが、近々オンライン公開を予定している。これに先立ち前回(2002-2004 年度)の科学研究費助成研究の報告書(佐々木 2005)をPDF 化し、既にインターネット上で公開している。サイトのアドレスは以下のとおりである。随時更新を進める予定であるので、折に触れてご覧いただきたい。

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった11名の査読協力者の先生方、企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘・徳永あかね・長友和彦の各氏に深く御礼申し上げる。編集事務局実行委員の石井怜子・楊虹の両氏(いずれも本号に論文を掲載)には装丁企画・執筆者との連絡調整・書式点検・校正などの実務に御活躍いただいた。掲載が決まった投稿論文をフォトレディー版に成形する作業は当初、基本的にはそれぞれの執筆者の責任でおこなうこととなっていたが、実行委員には主として不統一箇所の点検や修正指示などを通じ、また時には「レスキューチーム」として執筆者をサポートしていただいた。前号実行委員の向山陽子氏からも実務作業に関してさまざまな助言と技術指導・ノウハウ提供を含む御助力をいただいた。向山氏にはあわせて、経理・発送事務等の元締めとしてもこのプロジェクトを背後から支えていただいている。講演録の文字化にあたっては、唐澤麻里氏にご尽力いただいた。小林久美子・張瑜珊・矢高美智子の三氏には、発行作業にあたって御協力を仰いだ。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社と、今回も厳しいスケジュールの中、迅速に印刷製本作業を進めてくださった平河工業社にも感謝申し上げたい。なお、前号同様、本号の刊行も日本語習得・教育に関する研究のレビュー論文集編纂を目的とする長期プロジェクトの一環であり、このプロジェクトは2005 年度から新たに更新された文部科学省科学研究費補助金の助成を受けている²。

注

1. 本号に収録した投稿論文は「動向報告」と「展望論文」の2つの範疇に分け、査読者にもこの類別を念頭においてそれぞれの基準で御審査いただいた。動向報告が「研究の流れや関連する概念・学説を的確に紹介することで新進研究者にとって資料的価値のある有益な文献」という基準を満たすものであるのに対し、展望論文はこれに加えて「未解決の研究課題に対する解答ないし解決策(または有力な手がかり)を新たに提案する、あるいは先行研究の論点を新しい角度からとらえ独自の再整理・総括をする、メタ分析によってこれ

まで知られていなかった全体像を描き出すなどのオリジナルな貢献が顕著にみられるもの」である。ただし、この区分は研究分野自体の学問的成熟度やレビューの範囲設定など様々な要因に左右されるので、個々の収録論文の絶対的な質や、ましてや執筆者個人の力量に関する格付けを意図したものでは毛頭ない点にご留意いただきたい。条件によっては最初から「動向報告」の枠内に筆先を絞って先行文献の徹底した記述的整理に徹するのも一つの妥当な執筆アプローチであり、むしろその時々でそういった柔軟な戦略決定ができることが研究者としての懐の広さを示すものであると考えられるからである。

2. 「第二言語としての日本語習得・教育に関する研究のレビュー」基盤研究 (C) 2005～2008 年度 課題番号

17520343 研究代表者 佐々木嘉則

参考文献

- 佐々木嘉則(編) (2005)『第二言語としての日本語習得研究のレビュー論文集編集と刊行・オンライン配信』文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 菅谷奈津恵 (2002)「第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観」『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号 (『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—) 70-86.
- 森塚千絵 (2003)「日本語の指示詞コソアとその習得研究の概観」『言語文化と日本語教育』2003 年 11 月増刊特集号 (『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』) 51-76.

ささき よしのり／お茶の水女子大学